

分科会 11

一人ひとりが☆キラリ!

～障がいのある子どもと育ちあう児童館・児童クラブ～

障がいのある子どもの受け入れや、子ども同士のかかわりなど、私たちの役割はまだあります。めまぐるしく変化している社会・制度の中にあっても、子どもたち一人一人が「自分らしく・地域の中で・育ちあう」施設運営を考えてみませんか。

●事例発表

森口 妙子さん(条東小学校仲よし学級 指導員(大阪府泉大津市))

分科会内容

1. 分科会趣旨説明

分科会発案の小西より、全国大会の歴史のなかで「障がいのある子ども」がテーマに挙がるのが約20年ぶり2回目ということ、障がいの有無にかかわらず一人ひとりの子どもに向き合う私たちの働きについて共有していきたいという趣旨説明をしました。

2. グループワーク①

「自己紹介&課題・お悩み共有タイム」

北海道から沖縄まで、全国各地から集まった皆さんが6つのグループにわかれ、今回参加した「きっかけ」や、業務のなかでの「悩み」「課題」を付箋紙に各自記入し、その後、一人ずつ時間を設定して、付箋を模造紙に貼りながら、自己紹介を行いました。

3. 事例発表

森口妙子さんより、放課後児童クラブでの障がいのある子どもとの出会い、指導者としての支援の悩みや、子どもの成長の変化などをリアルに軽快にお話して頂き、「初めは特別扱いだった子どもたちが、お互いを認め合い笑いあっているのはなぜか?その答えは私たち大人にあるのではないか?」と、話題提供していただきました。

4. グループワーク②

「課題やお悩みに対する解決方法は?」

グループワーク①で出た課題や悩みに対して、それぞれの実践のなかでの意見交換や解決方法の提案などを行いました。

各グループより、「子どもの良さを見つけ、ほめる」「子ども同士の関係づくり」「障がいの理解や対応方法を知る」「保護者との会話と信頼関係の構築」「学校との連携による支援方法を共有する等の協力」などが挙がっていました。

5. グループワーク③

「そもそも課題の原因って?」

その時々解決方法もさることながら、その課題の根っこの部分に生じている原因について、その子どものみなら

ず、環境や社会情勢にも目を向けながら意見交換を行いました。

各グループより、「忙しい(子どもの放課後、親)生活」「施設が狭く、騒々しい、ゆったり過ごせない環境」「施設ルールや職員が厳しい(対応)」「親が子どもとの時間を持ってない(ゆっくり会話できない、対応できない)」「親が障がいを認めない」「職員の情報共有のなさ」「協調性を求めすぎる、自由がない」「周り(子ども・親)の障がいに対する理解がない」などが挙がっていました。

6. グループワーク④

これまで課題に対する「解決方法(How?)」「原因(Why?)」について話をしてきましたが、私たちが「何を(What?)」を大切に子ども一人ひとりと向き合っていくのか意見交換を行い発表しました。

各グループより「(職員間の)コミュニケーション」「その子にとって意味あること(を大切に)」「(ありのままを)受け入れる」「(家族や学校、関係機関等との)連携」などが挙がりました。

7. 自分へ贈るメッセージ

全グループの発表を共有したところで、参加者一人一人の時間を持つために、「わたしのいいね!カード」を記入していただきました。これは、自分へ贈るメッセージとして、明日からの仕事にむけて、自分自身にエールを送る言葉として、分科会を通じて感じたこと、考えたことを書いて持ち帰ってもらうことにしました。

8. まとめ

小西より、絵本「ふしぎなともだち」(作:たじまゆきひこ)(※1)の紹介をしました。

(※1)ことばでわかりあえなくても、心はわかりあえる。島の小学校に転校してきたぼくのクラスには、自閉症のやっくんがいた。障がいの有無をこえて「共に育ち、共に生きる」ことをえがく絵本。

この絵本のメッセージとグループワークのまとめとして、「私たちの仕事の究極の成果や結果というものは、子どもが大人になってはじめて見えてくるのかもしれない」

「私たちは、子どもが“自分らしく”“地域のなかで”“育ちあう”ことにかかわりながら見守っていただける数少ない存在(役割)ではないだろうか?」「How?”や“Why?”だけではなく、大切にしていける“What?”の部分で共有できたことが意味あることだった」と話し、子どもにかかわるすべての人たちが“一人ひとりが☆キラリ!”と輝いていこう!!と締めくくりました。

参加者数 29名

参加者の声

- ・グループごとに意見交換することで、自分自身の課題を見つけることができました。
- ・「職員の姿勢が大切」など、知識・対応の研修と職員間の情報共有が重要であると感じました。
- ・子どもを障がいのあるなしで区別するのではなく、どの子に対しても一人ひとりに丁寧にかかわり、わかりやすく伝えることを大事にしたいです。
- ・日頃からの親との対応、特に何気ない会話を重ね、それが信頼関係を築く一歩になると思います。これがいざという時に、保護者への説明が伝わりやすかったり、理解してもらえたり、困っている時の相談につながると感じました。
- ・もう少し具体的な対応や、方法について、聞いたり話し合いたかったです。

事例報告者から 分科会では、様々な角度や立場からたくさんの事案が出されました。そこで得たアドバイスや新しい発見は、これからの私に力を足してくれました。そして、分科会で決まった私の指針、それが、「いいねカード」です。『子どもと丁寧にやりとりする。その生活づくりを大切にしたいと思います。』(一部抜粋)

担当者から 「障がい」をキーワードにした分科会が、過去、全国大会で少なかったこともあり、参加者はこのテーマに期待も高く、また、日常での課題や悩みを積極的に話してくださり、最初から活気のある分科会となりました。話題の中心は、職員としての姿勢、どの子にもかわりなく接することの大切さが語られていました。

一人ひとりの子どもに向き合い、その育ちあいをサポートしていくことの議論を通じて、ケースワークのみならずグループワーク、コミュニティワーク等も含めた広義のソーシャルワークの実践を深める機会となったと考えています。今後も「障がい」や「インクルージョン」「地域生活(子育て)支援」「子育て支援と障がい福祉」などをキーワードにした継続的な分科会実施を提案させていただきます。

●担当 小西秀和(社会福祉法人西陣会 京都市障害のある中高生のタイムケア事業「ういず」、西陣児童館)、熊澤桂子(小田原短期大学)

